SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中学生の自尊心を低下させる要因についての研究：批判的思考の発達との関連から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 弘通, 太田, 正義, 松下, 真実子, 三井, 由里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007336

中学生の自尊心を低下させる要因についての研究

～批判的思考の発達との関連から～

A Research on Prevention Factors of Dropping Self-Esteem During Adolescence

加藤弘通・太田正義[1]・松下真実子[2]・三井由里[3]
Hiromichi KATO, Masayoshi OTA, Mamiko MATSUSHITA and Yuri MITSUI

（平成 24 年 10 月 4 日受理）

問題

近年、日本の子どもたちの自尊心や自己肯定感の低さが問題視される一方で、教育現場では自尊心や自己肯定感を育てるために様々な取組みが行われている。

これまで自尊心に関して心理学では、非常に多くの研究がなされてきたが、一致した見解として次のようなことが指摘されている（Robins & Trzesniewski, 2005）。1つは、思春期における低下である。具体的には、自尊心は小学校高学年から低下しはじめ、18歳ぐらいまで低下し続けるということである。2つは、その低下は、男性に比べ、女性のほうが著しいということである。こうした傾向は欧米のみならず日本においても共通して指摘されている（都筑, 2005）。

本研究は、このような思春期における自尊心の低下、あるいはその抑止に関わる要因を明らかにすることを目指すものである。具体的には、思春期の自尊心に関わるとされる諸要因を比較対照することで、どのような要因がより自尊心の低下（あるいはその抑止）に関連するのかを明らかにする。またそれを踏まえ、思春期における自尊心の過度な低下を防ぐためには、実践的にどのような支援が必要なのかを模索することが目的である。

それでは、なぜ思春期に自尊心が低下するのだろうか。その理由として、様々な要因が指摘されている。1つは、身体意識に関わる要因である。具体的には、第二次性徴によるボディイメージの変容や、その受容の難しさなどがあげられる（保坂, 2010）。また2つは、思考の発達に関わる要因である。例えば、Robins & Trzesniewski（2005）は、抽象的な思考の発達によって自己や将来について深く考えることができるようになることなどが青年期の自尊心の低下に関係していることを指摘している。また、このほかにも友人関係に変容（渡辺, 2011）や教師や親といった大人との関係のあり方の変容（葛西・永尾, 2004; 中村, 2004）なども関係していると言われている。

特に思考の発達については、ちょうど思春期前後に生じるとされる具体的操作期から形式的操作期への移行の影響があると考えられる。つまり、形式的操作期への移行によって、直接な経験に支えられた現実世界から解放され、可能なものや理想から現実世界を捉えられるように

[1] 常葉学園大学教育学部
[2] 静岡大学教育学部附属島田中学校
[3] 静岡大学教育学部附属浜松中学校

なる（Piaget, 1963/1968;中垣, 2011）。そのことにより、現実は単に受け入れるものではなく、別の可能性や理想と比較・吟味され、時に批判の対象となる。そして、これが自己に向かえば、自己の否定的な側面に目が向き（渡辺, 2000）、自尊心の低下を招くというわけである。言い換えるなら、思春期の自尊心の低下は、思考の発達、特に具体的操作から形式的操作への移行によって可能になると考えられるのである。

しかし、実際に思春期における思考の発達と自尊心の関係を実証的に検討した研究はほとんどない。そこで本研究では、中学生への質問紙調査を通して、思春期における自尊心と思考の発達がどのように関係しているのかを明らかにしていくこととする。具体的には、批判的思考（critical thinking）に注目し、自尊心との関係について検討にする。批判的思考とは、楠見（2011a）によれば、次の3つの観点から定義されるような思考である。1つは、「論理的・合理的な思考であり、規準に従う思考」であり、2つは、「自分の推論プロセスを意識的に吟味する内省的・熟慮的思考」であり、3つは、「より良い思考をおこなうために、目標や文脈に応じて実行される目標志向的思考」である。

この中でも特に1つめと2つめの観点は、形式的操作期を特徴づける仮説演繹的思考や反省的思考（二次的思考）の発生と合致している（Piaget, 1963/1968）。したがって、本研究では批判的思考を形式的操作期の思考の発達と関連するものと捉え（楠見, 2011b）、それと自尊心との関係を明らかにすることで、思春期の思考の発達と自尊心の関係を検討することとする。併せて、これまで指摘されてきた諸要因—友人関係や親子関係、教師との関係—についても検討し、それらとの比較を行うことで、他の要因と比べ批判的思考の発達がどの程度、中学生の自尊心と関連するものであるのかも検討していく。

方法

(1) 調査協力者

公立中学校3校の中学1～3年生、1743名。男子915名、女子828名、1年生593名、2年生584名、3年生566名。

(2) 手続き・調査内容

担任教員により授業時間内に質問紙調査を実施。質問項目の内容については以下の通りである（詳しくは、Appendix参照）。

①自尊心：Rosenberg（1965）を参考に、都筑（2005）が使用した項目に1項目を加え、5項目を使用し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

②批判的思考：平山・楠見（2004）の批判的思考態度尺度と前田・新見・加藤・梅津（2010）を参考に、平山・楠見（2004）で見いだされた4つの因子のうち、3因子（「論理的思考への自覚」「探求心」「客観性」）より2項目ずつ抽出した。また平山・楠見（2004）が高校生以上を対象としているため、文章表現については、実施校の教員と相談の上、前田・新見・加藤・梅津（2010）を参考にし、中学生に理解しやすい形に表現を改めた。こうして作成した全6項目に対し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

③友人関係：榎本（2003）の「友人に対する感情」より「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」の各因子から2項目ずつ選び、計6項目に「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

④親子関係：大久保・青柳（2003）の5項目を使用し、「あてはまらない」から「あてはまる」

までの5件法で回答してもらった。

⑤教師との関係：大久保・青柳（2003）の5項目を使用し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

調査期間は、2012年5月～7月。

結果

(1) 学年・性別による自尊心の違い

学年・性別により自尊心に違いがあるのかどうかを検討するために、自尊心を従属変数に、学年(3)×性別(2)で分散分析を行った（Figure 1）。その結果、学年においては、有意傾向がみられ（$F(2,1736)=2.94$, $p<.10$）、多重比較の結果、1年生と3年生の間に差がみられた。つまり、1年生に比べ3年生のほうが、自尊心が低いことが分かる。また性差については、有意な差がみられ（$F(1,1736)=17.52$, $p<.001$）、男子に比べ女子のほうが、自尊心が低いことが分かった。

つまり、本研究においても、これまでの研究と同様に、思春期において自尊心が低下する傾向にあること、また男子に比べ女子のほうが低いということが改めて確認されたといえる。

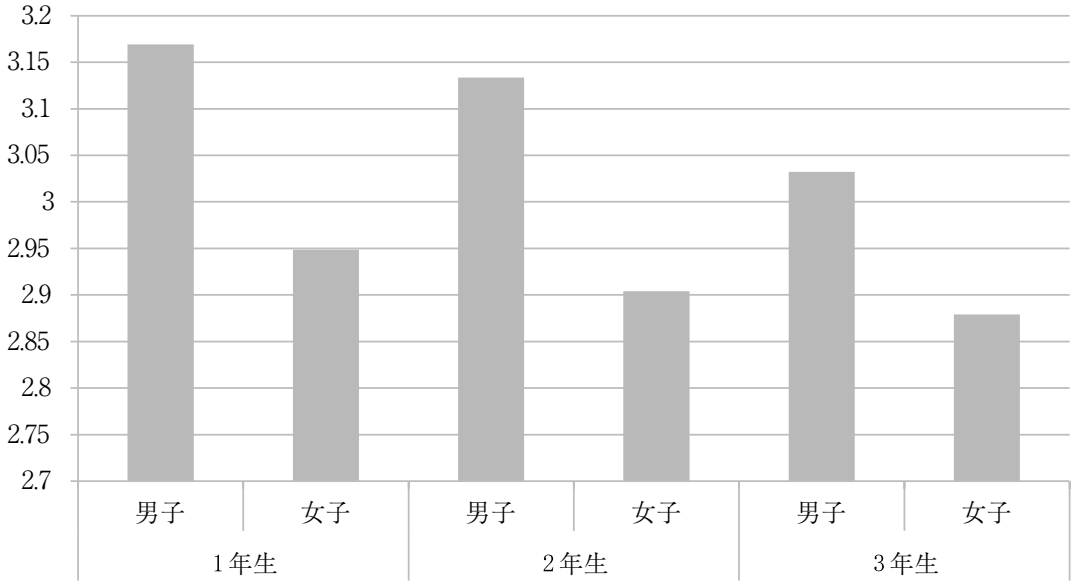

Figure 1　学年・性別による自尊心の違い

(2) 自尊心低下の要因

それではこのような思春期における自尊心の低下にはどのような要因が影響を関連しているのだろうか。それを検討するために、友人関係、教師との関係、親子関係、そして批判的思考と自尊心との相関係数を算出した（Table 1）。その結果、すべての要因と自尊心の間で有意な相関がみられた。

友人関係については、「信頼・安定」と「独立」において正の相関がみられた。つまり、友人に対して、信頼感をもてていることや友人との関係の中で自律的な行動がとれていると感じているほど自尊心が高いことが分かる。またそれとは逆に、「不安・懸念」においては負の相関がみられ、友人との関係において、自分が相手からどう思われているか気にするといった不

安が強いほど自尊心が低いことが分かる。

教師や親との関係についても正の相関がみられ、教師や親との関係が良いほど、自尊心が高いことが分かる。

Table 1 自尊心と各要因の相関係数

	友人関係			教師との関係	親との関係	批判的思考		
	信頼・安定	不安・懸念	独立			論理的思考	探求心	客観性
相関係数	.30**	−.23**	.25**	.27**	.34**	.37**	.31**	.21**
N	1744	1744	1744	1744	1744	1739	1737	1733

** p<.01

以上は、先行研究から予想される結果であった。しかし、批判的思考と自尊心の関連性については、予想に反する結果がみられた。つまり、本研究では先行研究の指摘から、批判的思考が発達することで、自尊心の低下が起きると考えていた。というのも、批判的思考が発達することで多面的かつ反省的に自己を捉え直すことが可能になり、自分自身の否定的な側面についても目が向くようになると考えたからである。したがって、批判的思考と自尊心の間には負の相関がみられると推測していた。しかし実際には、批判的思考の各因子と自尊心の間には正の相関がみられた。つまり、「論理的思考への自覚」や「探求心」、「客観性」が高まれば高まるほど、自尊心も高くなるのである。

また、自尊心との関連性の強さについては、「論理的思考への自覚」の相関係数はr = .37と今回調べた要因の中ではもっとも強い関連性を示していた。実際に相関係数の差を検定したところ、「論理的思考への自覚」と2番目に相関係数の高かった「親との関係（r = .34)」との間には有意な差はみられなかったものの（z=0.89, p=n.s.)、それに次いで相関係数が高い友人関係における「信頼・安定（r = .30)」(z=2.36, p<.05）や「教師との関係（r = .27)」(z=2.95, p<.01）との間では有意な差がみられた。つまり、批判的思考における「論理的思考への自覚」は、友人関係や教師との関係よりも、自尊心に対して相対的に強い関連性をもっていることが分かる。

それでは性別や学年によって、こうした要因には違いがあるのだろうか。またあるとしたら、どのような違いがあるのだろうか。以下ではそのことについて検討していく。

(3) 性別による自尊心低下の要因

先にみたように今回の調査においても先行研究と同様に、自尊心には性差が確認され、男子に比べ、女子のほうが有意に低かった。そこでここでは男女別に、どのような要因が自尊心と関連しているのかをみていく。

Table 2は、男女別に自尊心と諸要因との相関係数を算出したものである。男女別の分析においても基本的に全体の分析と同様に、友人関係の「信頼・安定」、「親との関係」「論理的思考への自覚」が自尊心との間で比較的強い関連性を示した。

またr = .30以上を基準に男女による違いに注目するなら、男子では、友人関係における「信頼・安定（r = .36)」と「独立（r = .30)」、「親との関係（r = .34)」、批判的思考における「論理的思考への自覚（r = .39)」や「探求心（r = .37)」が自尊心と比較的強く関連していた。それに対し、女子では、友人関係と自尊心の間にはあまり強い関連はなく、「親との関係（r = .36)」や批判的思考における「論理的思考への自覚（r = .32)」との間に比較的強い関連性が

みられた。つまり、友人関係は男子に比べ、女子の自尊心に対してはそれほど強い関連性がないことが分かる。

Table 2 男女別自尊心と各要因の相関係数

		友人関係			教師との	親との	批判的思考		
		信頼･安定	不安･懸念	独立	関係	関係	論理的思考	探求心	客観性
男	相関係数	.36**	−.17**	.30**	.27**	.34**	.39**	.37**	.25**
子	N	915	915	915	915	915	913	912	908
女	相関係数	.26**	−.27**	.20**	.26**	.36**	.32**	.23**	.19**
子	N	828	828	828	828	828	825	824	824

** p<.01

(4) 学年による自尊心低下の要因

先にみたように有意傾向ではあったが、1年生と3年生の間で自尊心に学年差がみられた。そこでここでは学年別に、どのような要因が自尊心と関連しているのかをみていく。

r = .30以上を基準に各学年の特徴をみていくと、1年生では、「親との関係（r = .31）」、批判的思考における「論理的思考への自覚（r = .40）」が自尊心と比較的強い関連性がある。2年生では、友人関係における「信頼・安定（r = .30）」、「親との関係（r = .36）」、批判的思考における「論理的思考への自覚（r = .35）」「探求心（r = .32）」が自尊心と比較的強く関連していた。3年生も2年生と同様に、友人関係における「信頼・安定（r = .31）」、「親との関係（r = .34）」、批判的思考における「論理的思考への自覚（r = .35）」「探求心（r = .30）」が比較的強く関連していた。まとめると、学年別でみた自尊心に関わる要因については、共通する要因が多く、学年による大きな違いは見られなかった。

以上のことをふまえ、以下では、思考の発達と自尊心の関係について検討を加え、実践との関わりについて考察していく。

Table 3 学年別自尊心と各要因の相関係数

		友人関係			教師との	親との	批判的思考		
		信頼･安定	不安･懸念	独立	関係	関係	論理的思考	探求心	客観性
1	相関係数	.29**	−.28**	.29**	.29**	.31**	.40**	.29**	.23**
年	N	593	593	593	593	593	592	592	590
2	相関係数	.30**	−.25**	.24**	.26**	.36**	.35**	.32**	.23**
年	N	585	585	585	585	585	583	582	580
3	相関係数	.31**	−.17**	.24**	.26**	.34**	.35**	.30**	.17**
年	N	565	565	565	565	565	563	562	562

** p<.01

考察

(1) 結果のまとめ

本研究は、思春期における思考の発達と自尊心の関係を明らかにするために、批判的思考に

注目し、分析を行ってきた。その結果、以下のことが明らかになった。

1つは、批判的思考と自尊心の間には、正の相関が見られ、批判的思考が深まることで自尊心が高くなる関係にあった。2つは、特に批判的思考における「論理的思考への自覚」は、他の諸要因と比べ、自尊心との関連性が強く、それは男女別・学年別にみても同様であった。そして3つは、批判的思考とは関係ないが、「親との関係」も他の諸要因に比べ、自尊心との関連性が強かった。以上のことをふまえ、以下ではそれぞれについて考察を加えていく。

(2) 批判的思考と自尊心の関係について

先にも記した通り、研究当初の仮説としては「批判的思考が発達することで、自尊心が低下するだろう」、つまり、「批判的思考と自尊心の間には負の相関がみられるだろう」と予想していた。しかし、結果はそれに反し、正の相関がみられた。このことの解釈についてはいくつかの可能性が考えられるが、ここでは次の2つの可能性を指摘しておきたい。

1つは、思春期における自尊心にとって、思考が深まることそれ自体が問題なのではなく、思考の深め方が重要だということである。特に自尊心と強い相関がみられた「論理的思考への自覚」は、具体的には、「考えをまとめるのが得意だ」「物事を正確に考えることに自信がある」という項目で調べている。つまり、ここでたずねられていることは、「こういった思考ができるかどうか」ではなく、「こういった思考をすることに自信があるかどうか」である。言い換えるなら、単に「能力」があるだけではなく、それについて「得意である」、「自信がある」と思えることが、自尊心を高めるように作用するということである。したがって、実践的には、批判的思考を意識させるだけでなく、それを本人がうまく使えていることに焦点をあてる、あるいは支援するような関わりをしていくことが重要であると思われる。

もう1つは、能力と自信は別物であり、本尺度が、思春期の思考の発達をうまく捉えていない可能性である。つまり、本尺度は、あくまで批判的思考への態度をたずねているのであり、極端な場合、客観的に見て、批判的思考という能力が十分に発達していなくても、自信だけはもっている可能性も考えられる（例えば、うぬぼれという形で）。したがって、今後は、このような批判的思考への態度を測定する尺度が、実際の批判的思考の能力や形式的操作期の課題の通過をどの程度予測するのか、検討していく必要があるだろう。

(3) 思春期の自尊心の低下を防ぐために

最後に本研究の結果から実践に対して示唆できることについて検討していく。

友人関係や教師・親との関係と比較して、批判的思考、特に「論理的思考の自覚」や「探求心」は、自尊心と強く関連していた。このことは学校教育で行われている様々な自尊心を育む取り組みという視点からみても重要な意味をもつと考える。というのも、現在の学校現場で取り組まれている自尊心を高める実践の多くは、生徒同士や教師との関係といった人間関係づくりを中心としたプログラムが主だからである（例えば、渡辺, 2011）。それに対し、本研究の結果は、生徒同士の関係や教師との関係よりも、批判的思考のほうが、自尊心と強く関連していることを示していた。そして、このような批判的思考は、通常、授業の内容やその進め方を通して育まれるものである（楠見、2011b）。例えば、「論理的思考への自覚」の「考えをまとめるのが得意だ」や「物事を正確に考えることに自信がある」といった力は、授業中の討論や自分の考えを文章にまとめ、伝えることを繰り返すことなどで培われると思われる。また「探求心」の「いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい」や「新しいものにチャレンジすることが好きである」といった力は、授業の内容やその工夫を通して、育まれる力である

ように思われる。

つまり、友人関係や教師との関係以上に、批判的思考のある側面（因子）が、思春期の自尊心と関連していることを示した本研究の結果は、人間関係づくりだけでなく、授業を通して自尊心を育てることができる可能性を示しているという意味で、実践への見直しを示唆するものであると思われる。特に多忙感が叫ばれる現在の教育現場においては、ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターグループといった通常の授業・活動外に新たなプログラムを付け加えるよりも、従来から行っている授業を工夫し充実させるほうが、実効性が高いとも考えられる。

まとめると、思春期における思考能力だけでなく、その能力の深め方に注目することで、授業を通して、思春期の自尊心低下の抑止にアプローチすることができるのではないか。したがって、今後は自尊心の低下が生じないグループや、上昇する時期に注目し、そこにどのような思考能力の深め方が関わっているのかを明らかにしていきたいと思う。

課題

今後の課題としては、中学生の思考の発達をどのようにして捉えるかという問題がある。今回使用した尺度（平山・楠見, 2004）は、高校生以上を対象に開発された尺度である。実際、それを中学生に使用した前田・新見・加藤・梅津（2012）の研究では、平山・楠見（2004）の分析結果とは異なる因子構造が見いだされている。したがって、今後は、こうした尺度の妥当性の問題を含め、思春期の思考の発達を捉えるのに、批判的思考に注目することが相応しいのかまで含め、検討していく必要があると考える。

文献

榎本淳子　2003　青年期の友人関係の発達的変化　風間書房

平山るみ・楠見孝　2004　批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響　教育心理学研究, 52, 186-198.

保坂亨　2010　いま、思春期を問い直す：グレーゾーンにたつ子どもたち　東京大学出版会

葛西真記子・永尾修一　2004　中学生の自尊感情・規範意識と親子関係との関連性　鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, 19, 25-34.

楠見孝　2011a　批判的思考とは　楠見孝・子安増生・道田泰司編　批判的思考力を育む：学士力と社会人基礎力の基盤形成　有斐閣, pp.2-24.

楠見孝　2011b　生涯にわたる批判的思考力の育成　楠見孝・子安増生・道田泰司編　批判的思考力を育む：学士力と社会人基礎力の基盤形成　有斐閣, pp.225-237.

前田健一・新見直子・加藤寿朗・梅津正美　2012　中学生の批判的思考力と社会的事象に対する関心・意欲および社会的態度　広島大学心理学研究, 10, 89-100.

中垣啓　2011　ピアジェ発達段階論の意義と射程　発達心理学研究, 22(4), 369-380.

中村公義　2004　子どもの自尊感情の変容と教師との関係性：学級経営における課題　現代社会文化研究, 29, 37-54.

大久保智生・青柳肇　2003　中学生の問題行動と学校および家庭環境への適応感との関連　日本福祉教育専門学校紀要, 11, 11-19.

Piaget, J.　1964　Six etudes de psychologie. Gonthier.（ピアジェ,P.（滝沢武久訳）1968　思考

の心理学　みすず書房）
Robins, R.W., & Trzesniewski, K.H. 2005 Self-Esteem Development Across the Lifespan. American Psychological Society, 14(3), 158-162.
Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
都筑学　2005　小学校から中学校にかけての子どもの「自己」の形成　心理科学, 25(2), 1-10.
渡辺弘純　2000　自分づくりの心理学　ひとなる書房
渡辺弥生　2011　子どもの「10歳の壁」とは何か？：乗りこえるための発達心理学　光文社新書

Appendix

①自尊心

1. 自分には、よいところがたくさんあると感じている
2. 自分は、いつも失敗ばかりしていると思ってしまう（逆転項目）
3. 私は、自分自身にだいたいまんぞくしている
4. ときどき、自分は役に立たない人間だと思うことがある（逆転項目）
5. １年前にくらべて、いろいろなことで成長したと思う

②友人関係

【信頼・安定】

1. 友だちとは気持ちが通いあっている
2. 友だちを信頼している

【不安・懸念】

1. 自分が本当に友だちと思われているか気になる
2. 自分が友だちにどう思われているか気になる

【独立】

1. 友だちと違う意見でも自分の意見はきちんと言う
2. 友だちと一緒にいても自分の意思で行動している

③教師との関係

1. 先生は生徒のいうことを真剣に聞いてくれる
2. 先生は生徒の気持ちをわかってくれる
3. 先生は生徒の相談にのってくれる
4. 先生は生徒に公平に接してくれる
5. 困っているときに先生は励ましてくれる

④親との関係

1. 親は私のいうことを真剣に聞いてくれる
2. 親は私の気持ちをわかってくれる
3. 親は私の相談にのってくれる

4.　親は公平に接してくれる
5.　困っているときに親は励ましてくれる

⑤批判的思考
【論理的思考への自覚】
1.　考えをまとめることが得意だ
2.　物事を正確に考えることに自信がある
【探求心】
1.　いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい
2.　新しいものにチャレンジすることが好きである
【客観性】
1.　物事を見るときに自分の立場からしか見ない（逆転項目）
2.　たとえ意見の合わない人の話にも耳を傾ける